

幼稚園 参観記



朝からあいにくと曇った天気である。八時五〇分に幼稚園に到着すると、もうすでに半数くらいの子どもが来ており、遊びはじめている子どももいたし、スモックに着かえている子どももあった。小学校の木造校舎と校庭をそっくりもらっているもので、庭はひろびろとしている。校舎も古いけれども、ゆとりがある。かぎのてになつて、二つの教室と、三つの教室とが校庭に面しており、その他に、会集室と称して、かなり大きな遊戯室がある。ここでは、早くもふたつ三つのグループがままごを始めている。また大つみきを動かしている子どもも数人ある。

クラスの数は五つだが、全部一年保育とのことである。

九時

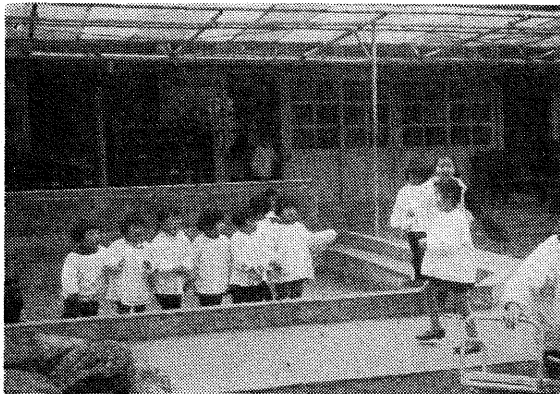
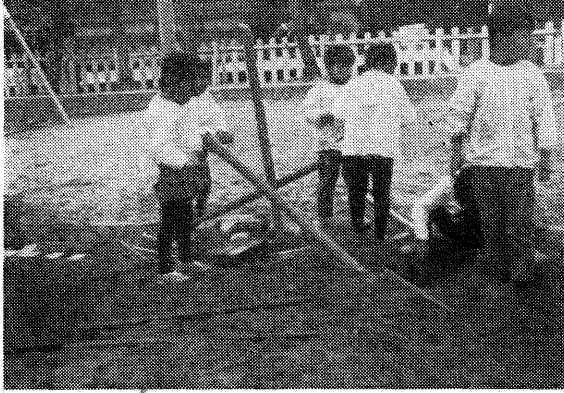
登園してくる子どもが、次次につづいているが、荷物を自分のへやにおいた子どもたちは、それぞれ何かしはじめのものが多く、会集室では、五人ほどの子どもが集って先生に花をわけてもらっている。だれかが、家からままご用に、生花をひとつかえもってきたらしい。じゃんけんして、好きな花を数本ずつもらって、ままごの場所をつくりはじめ。戸外では、先生が手伝って、とび箱のような形をした大つみきを運び出している。これは、戸外用のつみきとして作らせたものだそうで、とび箱の中段のように、天井がぬいである。数人でもたないと運べない。ひとつ運び出しては、またかけ出して、次のをとりにつづく。

ひとつの教室は、ビニールを床一面にしてあり、大きなかめに粘土がはいって、二か所においてある。数人の子どもがねんどのまわりにいる。廊下のつきあたりが木工場になっており、木工台があり、昨日から作りかけの根っこが木工台の上にある。二、三人の子どもがそれを見ている。

部屋を出たところに、水のはいつていないコンクリート水槽があり、女の子が二人、その中でろうせきをこすっている。

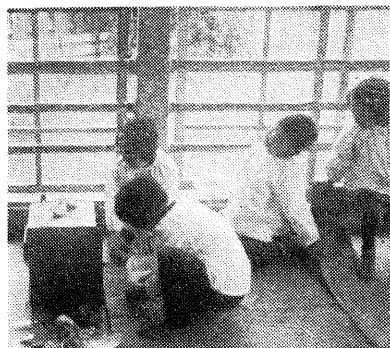
九時三〇分

玄関わきに、古自動車の車のとれたのが二台、戸外においてある。男児が数人、自動車によじ登り、屋根の上からとびおる。それを何回もくりかえしている。アトムの歌を口ずさんでいる。

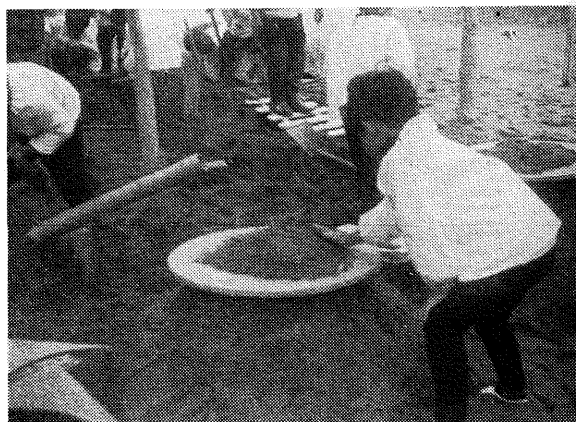


砂場に十人くらいはいっている。物置から、大きなベニヤ板のきりくずを出してくる。丸くきりぬいたものなどあり、木工工場からきり残しをもらってきたようなものである。ブロックをひとつずつころがしながら運んでいる子どもがいる。砂場に運びこんでいる。さっき出した大つみきの中にはいって遊んでいる子どもと、チャングルに上っている子どもがいる。校庭のまん中で、先生が木片で線をひいている。数人の子どもがまわりにきて、先生の手伝いをす

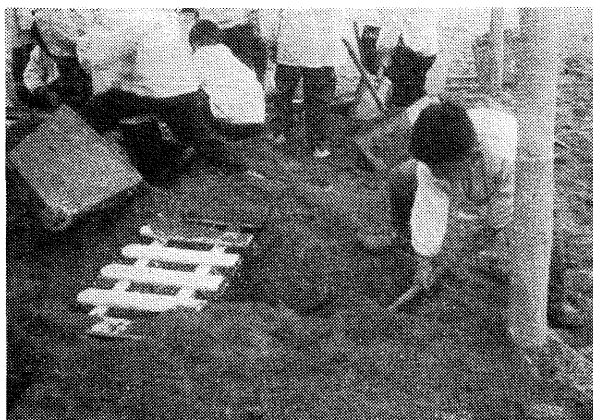
る。そこで先生を交えて、ドッチボールがはじまる。からの水槽の中では、十名くらいの女の子と男児が一名、七匹の子山羊と狼のうたをうたいながら、歌がきりになると、狼が山羊をおいかけて、おいかけごっこをしている。「オ母サンダヨッテ言ウンダヨ」「オ母サンダヨ」「ウソダヨ、ウソダヨ、狼ダ、オ母サンノ手ハモットモット白イ」ウワー

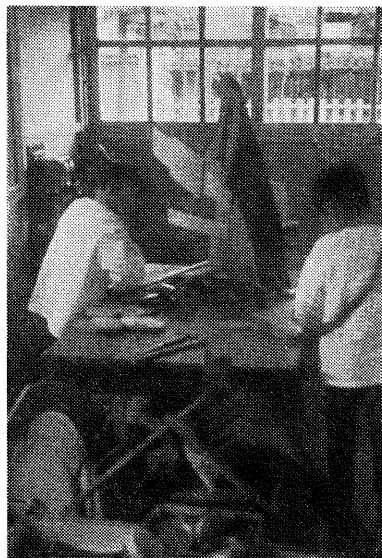
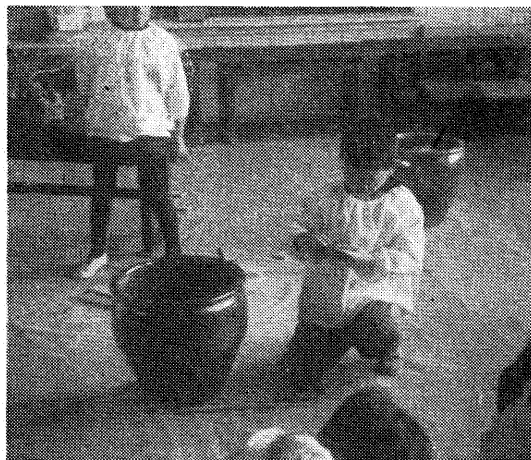


各部屋で相当活発に遊びがはじまっている。会集室には、ままとグループが六か所ある。ござだけしいて、切り刻ん



で、お皿にきれいに盛りつけているもの。ほんもの大根や人参、キャベツなど使っている。家からもってくるのだそうである。ついたてのかげの隅を利用してあるグループなど、それぞれ六、七人がグループになっている。滑り台の下では、魚つりっこをやっている子どもが、七、八人ある。ままごとは、先生が加わっているグループもある。「ヨソノオウチニイッテキマス」と言っていて、別のグループにいく子どももある。へやのすみのみかん箱をう





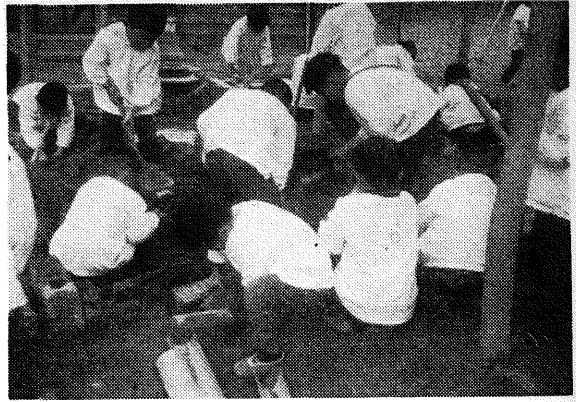
ちつけたようなおうちの中からも、二、三人の顔がのぞいている。砂場の中には、二十名くらいの男女児がはいっている。せん水かんだと言って、大砲がとりつけられる。戦車をつくっているものもある。二十名くらい、相互に連絡があるようだ。溝が縦横にでき、バケツで水を運んでいるものが数名いる。

七匹の小山羊ごっこは、汽車ごっこになり、十名くらい一列になつて、前の子どもにつかまって走っている。

室内、ねんどのへやでは、朝、きたときから、ねんどにとりく

で余念のない子どもが数名。ねんどに、ビール線のふた、ビニール線などがとりつけられている。ひとりずつが黙ってやっているものが多い。

毛糸のくずの箱の傍では、人形をつくっている女の子



が数名いる。カメラをむけると、くると背中をむけてしまう。

牛乳のふたに、細い糸を通すことに一生けんめいになっている女の子が数名いる。首かぎりを作っているらしい。

ねんどで腕をつくっている女の子もいる。

木工のコーナーでは、十名ぐらいの男児が、それぞれ木を切ったり、打ちつけたりしている。木工台の上上って、木の根っこに、大きな丸いベニヤ板を、一人が支えて一人が打ちつけている。

一〇時三〇分

砂場はいよいよ活発になる。

砂場の外にも、一面に砂がしいている。砂場の外で、女の子が二人、水をくんできて砂いじりをはじめ。お互いに腕をまくり合っている。砂場の外に砂をもち出すことが合理的に許されているようだ。

七匹の小山羊のグループは汽車ごっこになったので、先生がレコードをかけてやると、リズムにのって動く。先生が少し手をいれて、切符うりば、駅などができる。「夢ノ特急デス」「大津エキデス」「ノセテクタサイ」など言っている。「キップクダサイ」「キップカナイ、オ客サンガミンナモッテイッタ」など会話が交わされている。旗をもち出して、ふみきりもできる。汽車が何本もゆききし



ている。

リズムの部屋では、レコードが鳴って、十五人くらいの子どもたちが一列になって、曲の変化につれて、とんだり、歩いたりしている。

絵本のへやでは十名くらいが本をみており、ところどころで二、三名が会話をかわしながらみている。

粘土と製作の部屋ではあいかわらず、同じメンバーの子どもたちが、製作にとりこんでいる。

一一時一〇分 雨が降ってくる。

戸外のグループではそれぞれの場所がかたづけはじめ。戸外の大つきは、先生と一しよに、大勢ではこぶ。ひとりで動かそうとして苦労し、そのうちに友だちや先生が手伝いにくるものもある。

長い棒を二人でかついでしまうものもある。砂場の木片は物置へ、ブロックはひとつひとつころがしながらもとの場所へ、全員がよく動いてかたづけしていた。

全員が室内にはいったころ、おべんどうのしたくになった。

食事がすむ

と、また、それぞれの遊びにすぐにもどってゆき、一時ころになって遊びをやめて片づけるのが残念であった。

今日は雨が降ってきたので、使うのをみられなかったが、裏庭には、大きな酒樽を横にして、ままたこのうちが作ってあり、また、モー

ターボートの古いのを備えてあった。室内の壁には、古い電話器がいくつもとりつけてあった。これは利用率が高いそうである。いろいろの材料を豊富に用意してあり、それだからこそ、このように遊びが展開できるのだと思った。

一クラス約四十人であるから、幼稚園全体では二百人近い子どもがいるはずであるが、騒音や混雑がみられないのもおどろいた。周囲が広いせいもあろう。園長先生のおはなしによれば、この幼稚園は一見無秩序のようだが、子どもたちは、今日は何をしようとはりきってやってきて、目標がはっきりしているから、内面的な秩序があるとのことであった。なるほどと思った。

また、製作をする子どもも、砂遊びをする子どもも、自分で心に画いたものを最後までつくることができ、途中で止めて集りなさいといわれることがない。だから、安心して、身を打ちこんでつくっていられる、その姿は印象的であった。

しかも、ある期間をとれば、子どもたちは偏りなく、多くの経験をしているということも、もっともうなずけた。

(M)

